

審査結果の概要

本論文の内容は、公開審査会(平成26年11月6日9時~10時30分、文学部会議室)において説明がなされ、質疑応答が行われた。

柴田論文の審査会で討議された主な論点と研究史上の意義は以下のとおりである。

○審査会で取り上げられた主な論点

- ・ビザンツ時代に編纂された辞典『スダ』に基づいてヘレニズム王権を軍事王権とすることについて。とくにその史料としての説明と評価について。
また、軍事王権の性格と傭兵などからなる軍隊の支持の関係について。
- ・セレウコス朝における王族アカイオスの反乱の問題で、先行研究に対し、アカイオス反乱の叛意発生時期と動機を解明するとした課題に関する筆者の見解について。
- ・王位継承における戦争が国境画定の限定的な戦争であったとする点に関し、妥当な国境線、および「バルバロイ」と「ヘレネス」の区別のとらえ方について。
とくに第2章の事実関係が「手続き」としての儀礼的戦争というよりは、水面下の密約を通じた侵略戦争と捉えられることについて。
- ・キュレネの内紛・相続問題の事例の本稿における位置づけについて。
- ・セレウコス2世の事例に関し、敗者となっても王権の致命傷にいたらなかったとする評価に関し、異母兄弟とその後ろ盾を排除できたという点で、むしろ勝者という解釈も成り立つことについて。
- ・ヘレニズム時代の君主モデルとされたアレクサンドロスに関し、ポリュビオスによるテーバイ破壊の記述の評価について。
- ・ポリュビオスによるローマの評価とそのバルバロイとしてのとらえ方の解釈について。
- ・主要史料であるポリュビオスの史料批判と考察方法について。
参照テキスト、注釈書、また成立事情、論述の信用度、ポリュビオスの知的背景、とくにアリストテレスとの関係などに関する理解、および先行研究との関係について。
とくにテキストの演説文をそのままヘレニズム世界の人々の認識と評価する点について。
- ・当該期の碑文史料など関連史料について。とくにそれらによってポリュビオス解釈から明らかになった仮説を補強する必要性について。

- ・アレクサンドロスに関する史料引用部分の解釈の妥当性について。
- ・論証不十分な箇所(point)の点検の必要性について。
- ・添付論文要旨と英文要旨との内容の相違点と、記述・表現の問題点について。
- ・以上の点について質疑し、概ね具体的な説明と補足が行われ、また改善すべき点の確認が行われた。

○研究史上の意義

本論の成果は、ヘレニズム期の文化的統一性や政治的一体性を批判する近年の研究に対し、ヘレニズム時代の王権に、アレクサンドロスの後継者としての共通点を見いだしうることを確認したところにある。

とくに「後継者」の王国間では、初代国王の支配領域を基準とするという共通認識があり、これが王位継承時に「手続き（儀礼）としての戦争」という現象を生んだと指摘した点は興味深く、これはヘレニズム時代史のみならず、より広い時代と地域に関して今後の議論を喚起しうる指摘と評価できる。

さらに、残存史料が限られていることにも起因して、さらなる論証の精緻化、練り上げが必要な点も多いが、「後継者」の王国間で共有された空間認識が、その外部の勢力を「バルバロイ」と認識させ、彼らとの対立関係からヘレニズム世界の一体性が認められるとする点は、今後の新たな展開を予測させるものである。

また、本稿は、ポリュビオス『歴史』にたいする新しい解釈の試みでもあり、この論点をさらに精緻化できれば、学界への貢献も大きいと考えられる。

以上から、本委員会は、博士の学位を授与するに値すると判断する。